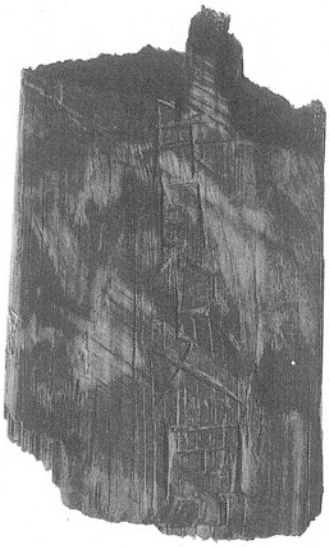
戸籍」（年未詳、『大日本古文書（編年文書）』第一巻三一七頁）と正倉院宝物の酔胡従面袋白絁裏に捺された「賛岐国印」（松嶋順正『正倉院宝物銘文集成』図録、一四六頁。吉川弘文館、一九七八年）などがある。

9 関係文献

平松良雄・和田　萃「奈良・東大寺」（『木簡研究』一六、一九九四年）

（1～7・9　西藤清秀
8　和田　萃・鶴見泰寿）



(1)

(3)

奈良・奈良女子大学構内遺跡

1 所在地　奈良市北小路町

2 調査期間　一　一九八七年（昭62）七月～一〇月、二　一九九三年（平5）七月～九月

3 発掘機関　奈良女子大学

4 調査担当者　坪之内徹

5 遺跡の種類　都城跡・中近世都市

6 遺跡の年代　八世紀～一九世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一　一九八七年度調査

（奈　良）

調査地点は大学構内から現やすらぎの道（平城京左京二条六坊五坪と十二坪の坪境小路に相当）をへだてた西側である。奈良時代は平城京左京二条六坊五坪の東寄りほぼ中央にあたる。一二世紀末の瓦葺き建物からなる寺院跡（焼失倒壊）、一

五世紀から一六世紀にかけての大きな井戸や南北方向の大溝など、顕著な遺構が多い。

近世には奈良町北辺の町屋として続いていたようである。木簡は一七世紀後半の石組井戸SE六一一から出土したが、次の時期にはこの井戸が破壊され、一八世紀前半～中葉に同じ場所に存在した墨屋および墨製作工房で使用した油煙受けが大量に投棄されている。したがって、木簡の時期はここまで下がる可能性もある。

二　一九九三年度調査

調査地点は構内の西南隅、現やすらぎの道のすぐ東側である。中世前期の遺構の残存が良好で、規模の大きな建物二棟・井戸二基・池一、トイレと考えられる大土坑一基（SK一九）を検出した。木簡はこのSK一九から出土した。共伴遺物は瓦器椀・土師器皿・須恵器擂鉢・木製遊戯具・下駄・漆塗椀など中世の遺跡に通有のものである。また、これらの遺構の中心時期は一三世紀である。

8　木簡の釈文・内容

一　一九八七年度調査

(1)　・「○高天×　　」

・「○手桶拾三之内」　　103×53×10　011

隅角部面取りを施した板材（材質不明）の表裏に墨書がある。第一字目のすぐ上、上面中央に○・四×○・二五㎝の穿孔がある。

二　一九九三年度調査

(1)　「□□□□□□□□

□□□□□□□　　(130)×(30)×15　081

二行にわたって墨書が見られることは確実であるが、各々の偏・旁、漢字・片仮名・平仮名の区別も明らかにできない。

9　関係文献

奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』V（一九九五年）

（坪之内　徹）